

自由応募分科会 4「北東アジアの海と島を考える: 稚内・サハリン、対馬・韓国、与那国・台湾」
報告3

天野尚樹(山形大学)

「上陸地・中継地・発出地：北海道・サハリン関係のなかの稚内」

A landing, transferring and forwarding place: Wakkanai city in the relationship
between Hokkaido and Sakhalin

北海道の最北端稚内市は、約 40 キロ北にあるサハリン島との関係における歴史的ゲイトウェイである。民間会社の運営による稚内～コルサコフ間の定期航路は 2015 年度で廃止されたものの、稚内市等の出資による第三セクターが設立され 2016 年度も運航が継続された。稚内～コルサコフ航路は、日本領樺太時代も 1923 年から 1945 年 8 月 25 日まで稚泊航路と呼ばれ、稚内と大泊（コルサコフの旧名）を結んでいた。市役所にはサハリン課が組織され、サハリン内 3 都市との友好都市関係を結びながら、サハリン交流に積極的な取り組みを続けている。

しかし、上位自治体である北海道、あるいは、サハリン側からの視点からみたとき、稚内の存在感は薄い。稚内はあくまでゲイトウェイであり、人やモノが上陸し、道内各地に中継され、人・モノが発出される地にとどまっている。さらに、上陸・発出地としても、この 5 年間ほどのあいだに、北海道内での順位を大きく下げている。北海道自体のサハリン交流への取り組みも、この数年でようやく進みつつあるが、航空ルートも有する札幌圏が中心であり、稚内は取り残されている印象である。

本報告では、まず、稚内市の地方自治体としては突出したサハリン交流への取り組み、上陸・中継・発出地としての稚内の歴史的経緯を紹介し、北海道対サハリン関係とそのなかでの稚内市の位置づけを検討する。そして、それらの分析をふまえて、ローカルイニシアティブによる跨境関係の限界と可能性を考える。